

博物館だより

No. 13

企画展 「つくる——一宮の職人——」

平成4年2月29日(土)～4月5日(日)



▲備中をつくる——野鍛冶・瀧吉夫さん

展示室から

現在私たちの暮らしの中で、手作りの「もの」はどれくらいあるでしょうか。例えば、バケツ。以前は手桶(チョーケ)がその役割を果たしていました。ザルなどの竹細工も見直されてきてはいるものの、消費者は安価で手軽なプラスチック製品を購入しがちです。そこで、今回は「職人展」の第1弾として、現在も市内で伝統を守り続けている職人—鍛冶・竹細工・紋型紙・和蠟燭・提灯・桶・木魚—に焦点をあて、再びその良さについて考えてみようとするものです。

市内には、指物、和菓子・乳母車など今なお生き続けているものをはじめ、すでに消えてしまった綿繰ロクロなど注目すべき職人の技術がたくさんあります。今回取り上げられなかったこれらの技術については今後の課題とし、第2弾の「職人展」を考えています。

発掘調査ニュース

平成3年度、一宮市博物館の事業として、大和町馬引の法圓寺中世墓、そして今伊勢町宮後のでんやま古墳の発掘調査を実施した。以下、紙面を借りて発掘調査の概要を報告する。

《法圓寺中世墓》

大和町馬引、法圓寺境内北側にあり、昭和6年、瀬戸、常滑、美濃須衛の蔵骨器10点が出土し、その存在を知られるようになった遺跡である。そして出土した蔵骨器は昭和36年3月27日一宮市文化財に指定されている。（「博物館だよりNo.12」で紹介）。

次いで昭和57年7月から8月にかけて、市教育委員会による発掘調査が行われた。約80㎡が発掘され、河原石の間から多くの蔵骨器や石製五輪塔が出土した。出土品は、蔵骨器など中世陶器130点余（瀬戸、常滑、美濃須衛窯製）、石製五輪塔（空・風輪18、火輪21、水輪17、地輪10、一石五輪塔1）などで、出土した蔵骨



写真1 法圓寺中世墓全景

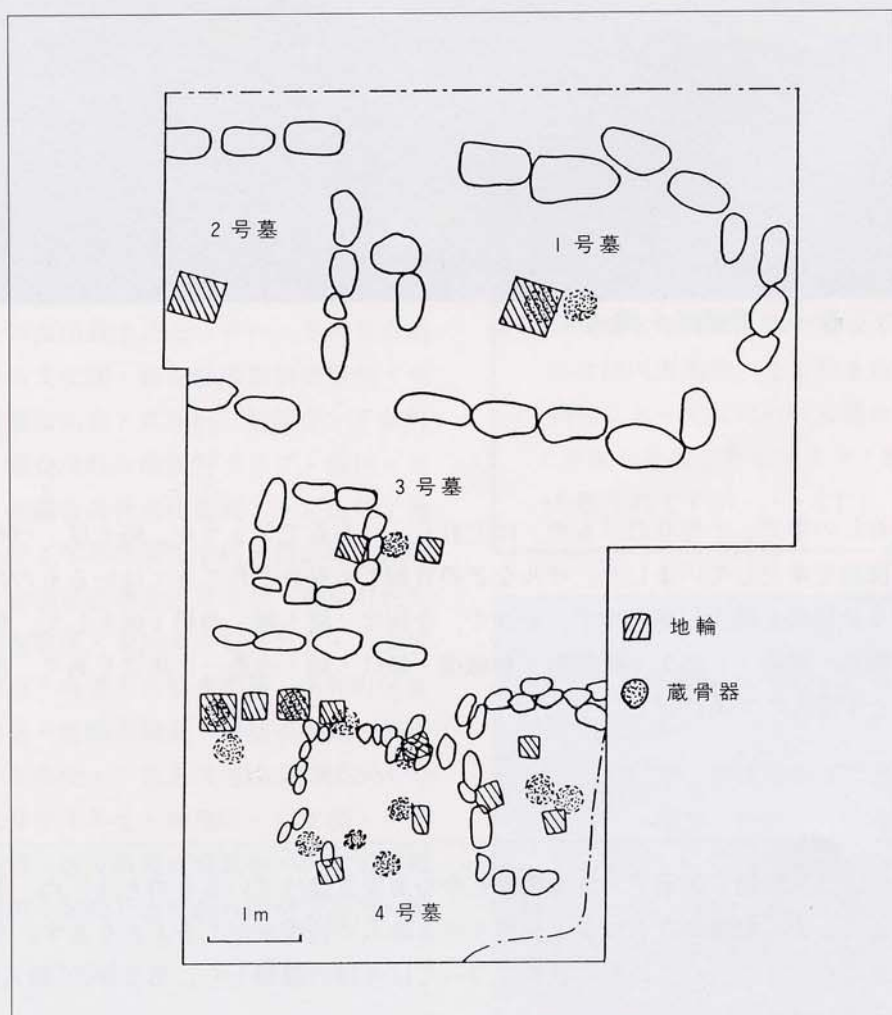


図1 法圓寺中世墓遺構略図

器などの検討から、この法円寺中世墓は、13世紀初頭（鎌倉時代初期）に形成され始め、15世紀中葉（室町時代中期）まで、存続したと考えられていた。

今回の発掘調査は、平成3年5月30日から8月8日まで実施し、発掘区は昭和57年発掘区の東に隣接した地点に設定し、発掘調査面積は約70㎡。（写真1・2、図1参照）

発掘区中央部で、東西3.65m、南北3.2mの積石墳墓を確認した（1号墓の呼称）。この1号墓は、長さ80cm前後の細長い礫を境界石として用いて方形区画を作り、その中にこぶし大の小礫（河原石）を積み込んだもので、積石中より、蔵骨器2組（ともに常滑焼の壺に瀬戸焼の片口鉢を蓋として使用したもの）を検出した。この二組の蔵骨器は積石墳墓の構築状況から同時埋葬と考えられる。蔵骨器の年代は、13世紀中葉の壺と13世紀後半の鉢、13世紀後半の壺と13世紀前半の鉢という組合せである。1号墓礫上で五輪塔（地輪1、水輪2、火輪2、空風輪1）を検出しており、これらの形式から14世紀前半代の築造と考えられる。

また、もう1基の方形区画の西半も検出したが（2号墓と呼称）、蔵骨器は確認できなかった。この2号墓も1号墓と同様の規模を持つものと考えられ、蔵骨器はもう少し東側に位置するものと推定される。礫上で、五輪塔（地輪1、水輪1）を検出している。

さらに、一辺約80cmの小型の積石墳墓も検出した（3号墓）。五輪塔2組、蔵骨器1を周辺で確認し、その後、小礫群を順次取り除いたところ、方形区画内では蔵骨器は検出できなかった。この積石は、3号墓の東に接

して一石五輪塔1基を倒れた状態で検出していることから、この一石五輪塔に伴う積石である可能性もある。

さらに、北側の地点は4.5m四方の間に五輪塔十数組が散乱した状態で検出できた。こうした状況は、昭和57年の調査と極めて類似している。検出した五輪塔（地輪10個、水輪15個、火輪15個、空風輪18個）は概ね14・15世紀代のものと考えられ、また蔵骨器は、瀬戸の四耳壺、常滑の壺など12点で、地輪下から蔵骨器が出土したものは6点である。

1号墓の南では、宝篋印塔3組などを検出している。これらの宝篋印塔は、その形式から15世紀末のものと考えられ、ひとつの宝篋印塔基礎には「宗列禅定門」の銘がみられる。また他の2つの宝篋印塔基盤と蔵骨器が近接して検出されており、蔵骨器の下半部は埋葬時の原位置を保っていると考えられることから、1号墓が中央部五輪塔周辺を残して土中に埋没した段階での埋葬と推定される。

また1、2、3、4号墓のそれぞれの礫上には、山茶碗小皿、土師器小皿などの小片が多数散乱しており、これらは供献用のものと考えられる。

以上が今回の発掘の概要であるが、1、2号墓に見られるような方形区画を持つ積石墳墓を原初的な形で確認したことは大きな成果と言えよう。特に1号墓の形態は「餓鬼草紙」そのままの風景である。また、昭和57年の発掘調査の成果とあわせれば、この中世墓は、13世紀初めから、15世紀末までの300年間にわたり営まれたことが確認できたわけである。

今後検討すべき課題は多いが、1号墓あるいは4号



写真2 法円寺中世墓1号墓骨壺検出状況



写真3 てんやま古墳全景

墓にみられるように、蔵骨器と五輪塔地輪、宝篋印塔基礎を共伴資料として把握できたが、このことは、五輪塔と蔵骨器の時期差、あるいは蔵骨器本体と蓋との時期差をどう捉えるかといった課題解決のための基礎資料となるものである。また1号墓の蔵骨器は、その構築状況から同時埋葬と考えられるが、もしそうだとすれば同一人物のものか、あるいは別個の人物のものなのか。さらには同時埋葬されたものなのか、あるいは改葬されたものなのか、これらは人骨の鑑定を待たなければ結論は下せない。さらに言えば、1号墓の状況と、4号墓、あるいは昭和57年発掘調査にみられる蔵骨器の出土状況の差異は一体何を物語るのか。1号墓構築時における墓地の改葬・整理といった可能性を含めて検討する必要もあろう。

《てんやま古墳》

今伊勢町宮後、今伊勢病院に南接する位置にあり、標高7.5m前後の日光川右岸自然堤防上に立地する。かつては10基を越える古墳があったという今伊勢古墳群に属し、昭和36年5月に墳頂部のみの発掘調査が行なわれたが、管玉1個が出土したのみで、主体部は滅失している可能性が高く、他の古墳との関連から、5世紀前半代の築造と推定されていた。

今次調査は、宅地造成により滅失するため、事前調査を実施したもので、調査は8月9日から11月30日まで、発掘調査面積は約220㎡。墳形、墳頂部主体部、周濠などを確認するため、幅2mのトレンチを設定し発

掘調査を行った。(写真3参照)

調査の結果、直径30m、周溝巾3.5m、墳丘径23m、高さ4m+αの円墳であることが判明した。また周溝部は、北東部で切れており、ブリッジ状の構築物で外側とつながるものである。

主体部は検出できなかったが、従来墳丘の中央と考えられていた地点より、約2m東の墳丘表土を中心にコンテナ4箱分の石材(偏平な山石)が検出されており、割石を小口積みにした竪穴式石室であった蓋然性が高くなると思われる。

墳丘を断ち割ったところ、所々攪乱を受けているものの、版築構造が把握できた。その観察結果によれば、古墳構築前に黒褐色のシルト性の高い砂で基盤を造成、その後墳丘封土を暗褐色シルト質砂層と黄褐色シルト質砂層を混入させつつ交互に積み上げるといった極めて計画的な構築過程を明確にとらえることができた。

また墳丘封土の暗褐色シルト質砂層からは、弥生式土器、古式土師器の小片が出土している。

従来今伊勢古墳群は、車塚古墳、野見神社古墳、てんやま古墳という編年がなされてきたが、てんやま古墳の主体部が竪穴式石室であるとするならば、従来の5世紀前半という編年に課題を提起したといえよう。

附 記

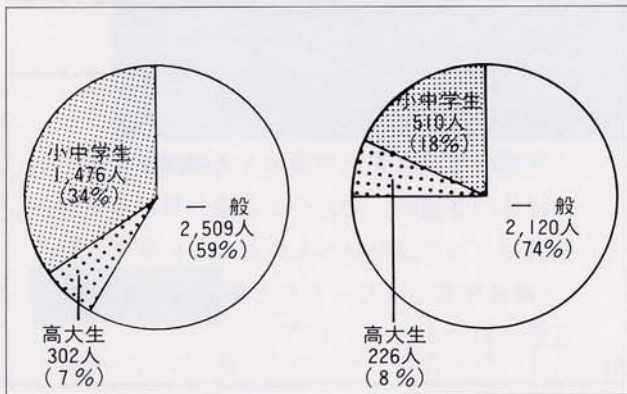
この発掘調査の成果については、平成4年6月6日から7月5日にかけて、「平成3年度埋蔵文化財出土品展」として展示する予定である。

(土本 典生)

【博物館日誌(抄)】(3.6.1~12.31)

- 3.6.16 博物館映画劇場
「変わりゆく地場産業—伝統技術とハイテク」 「彦星と織姫」
- 3.7.20~9.1 企画展「おもちゃ」
- 3.7.28、8.4
博物館講座「弥生機で織ってみよう!!」
- 3.8.11 博物館映画劇場
「ゴンタと呼ばれた犬」「日本昔ばなし—花咲か爺さん・一寸法師・さるかに合戦」
- 3.8.24・25 夏休み子供講座
「わら細工をつくろう!!」
- 3.10.6 博物館映画劇場
「ジャングル大帝 赤い翼」「日本昔ばなし—舌切り雀・桃太郎・浦島太郎」
- 3.10.26~11.24 特別展「風景を着る」
- 3.12.4 市民文化財めぐり
- 3.12.8 博物館映画劇場
「月光仮面—恐怖のこうもりの爪」「日本むかし話—鶴の恩返し・かちかち山・たのきゅう」
- 3.12.25 博物館講座「親子博物館めぐり」

【展覧会開催中の入館者数】



企画展「おもちゃ」7/20~9/1

入館者数 4,287人/38日

特別展「風景を着る」10/26~11/24

入館者数 2,856人/26日

☆平成4年度の行事

博物館では、平成4年度には5回の展示会と博物館講座を開催します。

博 物 館 講 座	★連続講演会「中世を語る」 —3回を予定
	☆親子博物館めぐり(親子20組、8月)
	☆史跡散策(甘酒祭見学など、10月)
	☆編布をつくろう(親子10組、11月)
そ の 他	★古文書を読む(近世地方資料、10回)
	★繊維講座(1年間)
	☆映画劇場(8月、9月、12月、3月)
	★文化財めぐり
	★島文楽公演

4月	4/25 ~5/24	特別展「棟方志功と 佐藤一英」
5月		→詩人佐藤一英と棟方志功の作品を展示。
6月	6/6 ~7/5	企画展「新出土品展」 →法円寺中世墓の出土資料を中心に展示。
7月		
8月	7/18	企画展「土の音を 楽しむ」
9月	~8/31	→日本の土鈴を展示。
10月		
11月	10/24 ~11/23	特別展「染織の 流れを探る」 →古代からの織りの技術 を展示。
12月		
1月	1/15 ~2/21	企画展「春濤の遺墨」 →収蔵品の中から春濤 の資料を展示。
2月		
3月		

○日程や名称は変更することがあります。

これからの博物館

☆一宮市博物館春季特別展

「棟方志功と佐藤一英」

会期 4. 4. 25(土)～5. 24(日)

古典的象徴派の詩人・佐藤一英（1899—1979）と板画家・棟方志功（1903—1975）は、志功と同郷の詩人福士幸次郎（1889—1946）を介して出会った。昭和11年（1936）、志功は一英の長編詩「大和し美し」を板画卷として世に問い、民芸運動の柳宗悦に認められ、世界的大板画家として大成へのきっかけとなった。翌年にも共同の作品として、「空海頌」「東北経鬼門譜」を発表した。

一英は、その後、独自の定型押韻四行詩を生み出すなど多大の業績を残し、戦後ふるさと一宮に定着した。また、幸次郎とのふれ合いの中で尾張日本文化発祥地論「かしの木文化論」を唱えた。青森への望郷の念を生涯抱いた志功は、宗教と回合しながらその作風を展開させた。

本特別展では、一英と志功の代表作品を一堂に展観し、彼らの芸術的触発と人間的行き方を追求するものである。

出展資料は、志功と一英の共同作品「大和し美し」をはじめ志功や一英の主要作品を網羅するものとし、(財)棟方志功記念館等から借用する予定である。

なお、会期中に作家長部日出雄氏を招いて記念講演会も予定している。



門世の棚（棟方志功記念館蔵）

【ご来館有難うございました】

(3. 6. 1～12. 31)

県立尾張病院・一宮市消費生活センター・多治見市旭ヶ丘公民館・鈴鹿市文化課・新規採用教員研修会・サンタ・マリヤ幼稚園母の会・吉田収三後援会・千秋町婦人部衛生委員・能登川町川南長寿クラブ・新川・五条川期成同盟会・県議会農林水産委員・一宮市親子施設めぐり・大阪大学工学部建築工学科・豊山町文化財研究会・一宮市社会福祉協議会浅井支会・萩原町民生委員協議会・中国視察団・東知多生花愛好会・日銀名古屋支店・東海銀行・海老名市監査委員・平和町区長会・平和町納税組会・豊橋市職員・徳島市議員・渋谷区議員・大和南中1年生・一宮市環境協会(施設めぐり)・向山小6年生・浅井中1年生・検察庁一宮支部・小田原市議・高崎市職員・佐屋町教育委員会・N T T情報化調査委員・一宮市小学校社会科教材開発委員他・愛知考古学談話会

編集後記

平成3年度は5回の展示と各種講座、さらには法円寺遺跡、でんやま古墳の発掘など博物館にとってはたいへん慌ただしい年でした。「平成4年度こそじっくりと腰を落ち着けて」と思うのですが・・・(T)

一宮市博物館だより 第13号

平成4年2月29日

編集・発行 一宮市博物館

〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地

TEL 0586-46-3215

FAX 0586-46-3216